
蠍の王から権天使へ

浅井健一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蠍の王から権天使へ

【Nコード】

N6729Y

【作者名】

浅井健一

【あらすじ】

書簡体小説。ファンタジー。友情と嘘と文房具の話。

2月10日

蠍^{さそり}の王ルカから権天使^{ごんてんし}オーウェンへ

この書簡を定期郵便船で送るから、オーウェン、君の元に届くのはおそらく一週間後になるだろう。先月の明星祭の後、機構クリムトからの通達によって、君は御両親のいる租界地へ旅立ってしまったけれど、そちらの生活は快適かい？

小耳に挟んだところでは、最近、南軍が不穏な動向を見せているらしいから、総督府のすぐ近くに引越した君や、君の御両親がとも心配だ。まあ、君のことだから新天地でも上手くやっているのだろうけれど、できるなら日々の暮らしや出来事などを知らせてほしい。

さて、ここからは僕の近況を書くでしょう。

僕の？ いや、正確には僕が通う蟹座学園の近況だ。

先月の明星祭で、僕ら二人の催し物が大成功に終わってからというものの、学園では退屈な日々が続いている。二月は外で遊ぶには肌寒い季節だし、残念ながら雪も降り積もることがなかったから、卒業式の時まで僕らは図書館や通天蓋市場で心を慰めるしかないわけだ。

……というのは表向きの話さ。オーウェンも、そんな話を読みたくないだろう？

僕らが今夢中になっているのは月読文具店だ。

不思議な名前じゃないか。

『月読文具店（LUNASPION）』

実物も名前に負けないくらい不思議な店なんだ。

ええっと、月読文具店について何から書けば良いのだろう。オー

ウェンは何も知らないわけだし……そうだ、やっぱり最初から書くのが一番だろうね。

それは、何の前触れもなく訪れる、冬の極日彗星のようだった。

明星祭の三日後、北部同盟の港湾都市『佃奉^{デンホー}』から、三人の異邦人がやってきたんだ。

佃奉は地理の授業で勉強したとおり造船と貿易の街で、西の友邦都市連合や周縁サテライトからの物資や人が集中することで知られている。とはいえ、統制経済下にある僕らにとって佃奉は遠くて関わり合いのないところでもあったわけだけど、明星祭の三日後、あれは満月の夜だった、三人の異邦人が馬車に荷物を山積みして蟹座学園に訪れたのさ。

彼らは学園の近くにあった古びた家を間借りして、真夜中だけの秘密の店を開いた。

それが月読文具店だ。

彼らは佃奉から来たけれど、彼の地の人間ではなくて、もっと遠い土地からずっと旅をしていたらしい。僕らの共通の友人、レイヴアンは彼らを「ロマ」と考えているけれど、本当の素性を知る人は誰もいない。まあ、彼らがどこの誰であろうが関係ないのだけれど、そういうこと、やっぱり気になるかな。

一人は女だった。店番をしている彼女を僕らはトーラと呼んでいる。

一人は男だった。いつも学園の周りを散策している彼を僕らはイエンと呼んでいる。

一人は正体を隠していた。僕も一度だけしか、灰色の布で全身を覆った彼の姿を見ていないし、文具店の地下に住む彼の呼び名はない。

彼らの店は日が沈み、群雲の中から月が姿を現したときだけ開かれる。

そこにある商品は、僕らが一度も見たことのないものばかりなんだ。クリムトの管理下におかれている僕らにとって、文房具といえ

ば百合印の支給品と決まっていたから、とても魅力的だった。

例えば南洋の王様が持っていたという鯨骨の万年筆や古代パピルス紙のノート、レモネードの香りがする消しゴム、別世界地球儀、三頭政治時代の真鍮製ナイフ、それから……そう、この便箋もそう、蝶の紋章が透かしの技法で印された便箋は、タイマノフ社の世界に五つしかない特注郵便封筒だ。

租界地へ旅立ってしまった君へ手紙を送ろうと、初めて月読文具店を訪れたとき、僕の事情をそれとなく察したトーラが特別に一番奥の引き戸から出してくれたのさ。彼女はこの便箋なら、きつと君が気に入ってくれると保証した。それでもダメなときのことも考えて……ね、驚いただろ？

君が好きなライムミントの香水を一滴垂らしておいたよ。

親しい者への信書に香りを乗せるのは、友邦都市連合では割合普通に行われていることらしい。僕もそれに倣ったというわけさ。権天使の君と、蠍の王である僕の、変わらぬ友情のために。

でも、僕は一人だ。

通い慣れた学園に君の姿だけが欠けている。僕は毎朝、教室に入るとき、君の幻を見てしまうんだ。君の幻は瞬きによって消えてしまい、僕は一人、そこに残り残されてしまう。オーウェン、君に分かってもらえるだろうか？僕は耐え難い感情を、強要させられる寂しさを、それでも押さえ込んで、今、この文をしたためているということを。

この心の虚ろさを埋めるのに、どうして月読文具店で事足りるというのか。

このまま君の中の僕が月日と共に風化して、ノスタルジアしか残さない存在に墜してしまうのは嫌だから、これからも手紙を書くことにするよ。

さよならが嫌いだから、結びの言葉は使わない。

ただ、大切な時間を僕の手紙で浪費させてしまったことに、

『ありがとう』

とだけ書き添えておく。

2月20日

拝啓、という前置きはこの際禁止にしようというのはどうだろう？

形式なんて面倒だから、ゴミ箱に捨ててしまったよ。

前回は月読文具店のことばかり書いたから、今回は自分のことを中心に書こう。

今日は午前中までで授業が終了したので、僕は通天蓋市場の旧通りに出かけた。射手座航空社の六道通天台を仰ぐ、半世紀前もの建物が日陰によって保存された街並みを、「常夜路地」と表現したのは、あのレイヴアンの奴だった。常夜路地って統制経済で荒廃した通りに相応しい名前で気に入っているのだけれど、奴にそのことを伝えるのは僕の自尊心が許さないから、今まで一度もレイヴアンの前で口にしたことがない。

友人なのにな？ いや、友人だから、だろ？

まあ、それはともかくとして、僕は常夜路地の水道橋沿いにある魚座剥製水族館を訪れた。あのホルマリン漬けの古代魚が展示されている水族館に、僕は月に一度の頻度で通っている。寂しいことや辛いことがあったり、感情的になったとき、僕は水槽に浮かぶ龍魚や深海魚を見て心を落ち着けるんだ。

今日、そこへ行ったのは、もちろん君がいない世界に耐えるためだった。

……こうして君を想いながらペンを走らせていると、孤独が薄れてくるから不思議だ。僕は思う。オーウェンのいない世界は色彩も、星々も、四季もない空間だと。君を喜ばせるために書いている訳じゃない。学園で、つまらない授業を聞き流していたとき、僕は決闘拳銃で撃たれたみたく、そうした激情に支配されたんだ。

だから僕は逃げた。

魚座剥製水族館が、僕の心を一時でも慰めてくれるのを希望して。

水族館へは君も行ったことがあるだろう。僕はトークン三枚でチケットを受け取ると、地下展示室に続く階段を下りた。黒く塗り固められた壁に、ほの暗い裸電球の明かり。階段の両側にはホルマリン水槽が詰め込まれて、盲目の魚や手足の生えた魚、頭の部分が歪に大きい魚の死骸が僕を待ち構えていた。輪切りにされたシーラカンスや、鯨の胎児などが。

僕は魚の造形と、意志を持たない瞳が好きだ。

世の中のままならないことに身悶えしているとき、魚を見ると、心の揺れが瞬く間に凧になる。僕らはなぜ魂という厄介なものを持っているのだろう。魚のように、流れに任せて泳ぐだけの生で十分じゃないか。オーウェン、僕は時々、この心がとても邪魔になる。

……嘘だよ。

魂があるからこそ、君との友情を感じていられるのだから。

地下へ続く階段は、剥き出しになった岩盤の部屋へと繋がる。太古、この界限は内海だったという。何百万年もの昔の地殻変動によって、堅い岩に閉じこめられた魚が化石になって、そのままの姿を留めている。地下展示室の四方を囲む岩盤に、群れをなす小魚や巨大な闘魚が浮かんでいた。

地上から隔絶された魚の墓地に、僕は降り立つと、そこには先客がいた。

「母なる海は闇、泳ぐ魚は銀河の星か」

と呟いていたのは、月読文具店を営む異邦人の一人、イエンだった。

偶然というのは何て都合の良い概念なのだろう。

彼は黒コートに色眼鏡、そして帽子という服装だった。背が高く、色白で、穏和な顔立ちをしている。イエンは毎日蟹座学園の周りを散策していた。ある人は、彼はこの土地の産物を物色しているのだ

と言い、ある人は、彼が土地の風物を紙に書き記していたのを見たという。イエンについて確かなことは何も分からず、僕にとって確かなことは、今、彼が魚座剥製水族館に来ているということだけだった。

僕が挨拶をすると、イエンも軽く会釈を返した。

僕が自分の名前を告げると、イエンは、

「君が、ルカ君か。トーラから聞いているよ」

と言った。

異邦人が僕の名前を知っていたとは思わなかったから、戸惑って頬を赤らめてしまったけれど、彼はそんな僕に水族館を案内してもらいたいと依頼したんだ。でも、イエンはとても物知りで、案内されたのはむしろ僕の方だった。あれはプロトプテルス・アンフィビウス、肺を持っていて夏眠をする、みたいな感じに。

一緒に化石魚展示室を巡っている間、僕はイエンに色々なことを話した。射手座航空社の黄道巡礼飛行船や、気象衛星から送られてくる天気予報について、北の禁域のこと、レイヴァンのこと、僕のこと、

そしてもちろん君のことを。

明星祭の時、僕らが演劇の主役だったことを、イエンは誰かから耳にしていたようだ。『天使と蠍』。天上での戦の最中、翼を失った権天使を、地上を統べる蠍の王が命に代えて守る物語は、友情を第一に考える僕らにとって聖典の文言に匹敵する意味を持っている。イエンも、僕らの劇を拝見したかったと残念がっていた。

だから、僕は嬉しくなって、彼に明星祭の時の写真をあげたのさ。丁度、天国から墜ちた君を、蠍の王である僕が助け起こす場面の写真を。僕のお気に入りの一枚だったけれど、それをあげるほど嬉しかったんだ。だけど、イエンは僕の宝物をただ貰うのは気が引けたようで、ポケットから青銅製の招待券と、小さな象の置物を手渡した。

招待券は、月読文具店の常連客にだけ与えられる、映画上映会に

参加するためのものだ。

それは蟹座学園で今、最も価値があるアイテムだった。イエンは僕に「今夜は是非来て貰いたいな。海洋冒険の記録映画を上映する予定だから」と耳打ちして、岩に閉じこめられた魚たちの眼下で動き、蠍の王である僕のために最高の席を用意すると約束したんだ。

イエンは昇降機で地上に戻るまで僕に付き従った。彼は今日一日、ここで魚の死骸を眺めているのだと言う。昇降機の扉が閉まり、左手に持っていた招待券を見つめ、僕はこっそり微笑んだ。だってそうだろう？ 月読文具店で行われる上映会は、蟹座学園でも限られた生徒しか招待されないのだから。

この話を、クリスやマーチンに言ったら、物凄く嫉妬されるだろうね。

でも、本当はオーウェン、君と一緒に行きたかった。

こういうとき、僕は自分の弱さを痛感させられる。だって蟹座学園を離れて生活している君の方が、もっと孤独なはずなのに、僕はオーウェンへの手紙で弱音ばかり書き連ねている。僕はいつも強がっているけれど、本当は君がいなくて何もできない弱虫なんだ。

弱さを認めるのは、とても勇気がいることだけれど、君には僕の弱さを知ってもらいたい。

さあ、もう上映会の時間が近づいている。今日はこのくらいにしておくよ。

イエンから貰った象の置物は、背中部分が蓋になっていた。たぶんムガル王朝で使われていた薬瓶か小物入れなのだろうけれど、この手紙を入れて、小包で君の元送到ることにする。イエンもきっと、僕が君に手紙を書くことを見通して、この真鍮製の象の置物をくれたのだろうから。

それじゃあ、また。

こういうときに書く言葉、

『ありがとう』

と、書き添えて。

（追記）

そういえば、レイヴァンの奴は月読文具店と三人の異邦人を毛嫌いしている。あんなに楽しい場所なのに、なぜだろう。明日にでもレイヴァンに、理由を問い質してみよう。

3月1日

蟹座学園に雪が降った。

冬の終わりに積もる雪は、辛い季節を乗り越えた御褒美のようなものだった。租界地はここからずっと南に位置しているから雪は降らないだろうけれど、君なら僕の高揚した気分が分かるよね。今日の天気は雪、休み時間に雪遊びをしたり、理科の授業で結晶を顕微鏡で覗いたりした。

雪の結晶は一つ一つ違う形をしていて、そのどれもが美しい。でも、美しい自然の被造物は顕微鏡のプレパラートの上で、瞬間に溶けてしまうんだ。僕はその儚さを観察しながら、思い立った君に手紙を書こう、と。

そういうわけで、オーウェン、租界地での暮らしはどうだい？
風邪なんか引いていなければいいが。

どんなに完璧な構造物であっても、やがては溶けて、消えてしまう。それが自然の摂理だったり、現実だったりするのだけれど、理解はしているのに僕は永遠性を求めてしまう。儚さを愛でる心なんて、僕は知らない。でも永遠なんて、きっと、どこにもないんだ。こうして君に手紙を書いているのも、いつかは霧消してしまう友情を、一秒でも長持ちさせようとする僕の無駄な足掻きなのかもしれない。オーウェン、僕にはそれが許せない。僕たちの友情は永遠不変であって当然なはずなのに、僕はそれを信じることができないでいるんだ。

ねえ、僕らは今でも親友だよ。

たぶん、そうだ。でも、未来までそうとは限らない。そんなことを考えると、僕は夜も眠れなくなる。ベットの中で両足を抱えて、僕はじっと自分の中の恐怖と戦うんだ。

僕はこれからもずっと、自分の弱さに向かい合わなければならぬのだろうか？

思い悩むけれど、まあ、いいや。こうして君に手紙を書いているときだけは、確かに君と繋がっていると感じていられるのだから、ね。

前回、僕は月読文具店の上映会に招待されたと書いた。映画鑑賞の機会なんてほとんどない蟹座学園の生徒にとって、海洋冒険の記録映像はとても刺激的なものだった。次の日、僕はクラスのみんなから羨ましがられたよ。

レイヴァンを除いて。

僕と君の共通の友、アルフォンス・レイヴァンは変人だ。彼は霊的な感性が強く、理性をあまり信用していない。勉強が嫌いだけれど試験の選択問題は百発百中で、いつも湾で夕日を眺めながら、どこかで調達した「すつとするやつ」を蒸かしている。レイヴァンはそういう人間だから、月読文具店が開店したら真っ先に常連客になると思ったのだけれど、

「あそこに行くのは感心しない」

と、妙に分別臭いことを言うんだ。

な、可笑しいだろ？ あのレイヴァンが僕を非難するんだぜ。

でも、僕はいつの言うことにも一理あると思う。月読文具店は蟹座学園の、ひいてはクリムトの認可を受けていない店だし、三人の異邦人がここにやってきた理由も分からない。商売のため？ だったら他にもっと儲かる場所があるさ。オーウェン、君がいる租界地とかね。

それに店内に陳列された奇妙で綺麗で世に二つとない品々は、どこから仕入れたものなのだろう？ それらを手頃な値段で僕らに売るわけは？

レイヴァンは、たぶん月読文具店から何かを感じたに違いない。だからあんなに嫌悪するんだ。

オーウェンはどう思う？

レイヴァンと月読文具店の話はこの位にしておこう。

さて、気が付けばもう三月だね、オーウェン。

月読文具店がなければ退屈で仕方なかったに違いない二月から、僕ら蟹座学園の生徒が待ち望む三月へ。それはもちろん卒業式があるからに他ならない。

卒業式。

本当は『華やぐ世界へ連なる式祭』というみたいだけれど。

まあ、それはともかくとして、卒業式が蟹座学園で最も重要な行事だつてことは君も承知しているだろう。我らが学園長の言葉を借りれば、「君たち蟹座学園の生徒諸君が卒業すること以上の大事は何一つない」というわけだから。

白い紙吹雪が舞い散る中、祝福を受けた卒業生たちはクリムトの天秤宮院によって選別されて、射手座航空社の水銀ロケットで外界へ旅立つ。二重螺旋の六道通天台から飛翔する水銀ロケットはちょっとしたスペクタクルさ。僕とオーウェンは去年、それを羊ヶ丘で眺めたよね。

でも、不思議じゃないか。

僕らは卒業生たちが水銀ロケットに乗って、それからのことを何も知らないのだから。

蟹座学園は地理的には純血海岸の南端に位置し、地政学的には機構クリムトが管理する「聖域」に指定されている。純血海岸一帯を統制経済によって運営するクリムトは、帝制期に三千世界の調停を目的に組織されたというけれど、僕らが知っているのは蟹座学園に対して絶対的な権威を持っていて、生徒を外界から隔絶しているということぐらいだ。

こういうことってみんな気にならないのだろうか？

僕らは物心つく前から蟹座学園にいて、自分の未来について何も

知らされないまま成長していく。僕はこの時期になるとそれが不安でたまらなくなるんだ。卒業したらどうなるのだろうって、ぐるぐると、終わりのない渦巻きのように考えてしまう。オーウェン、君は僕のことを笑うだろうね。自分だってそう思う。だって、巣立っていった卒業生はみんな祝福されているのだから。

祝福されているのだから、不安になることもない。

そうだよね、オーウェン。

僕が魚座剥製水族館に行ったとき、イエンにこのことを話した。

彼は少し考えて、

「君たちは、円の過程にいるのだから、その疑問はもっともなものかもしれない」

と意味深げなことを言い、煙に巻いたけれど。

でも、円の過程というのも面白い言葉だね。僕ら蟹座学園の生徒が円の過程にいるなら、君は今、円の外にいるわけだ。

ねえ、オーウェン、君は……

いや、ここで書くことではないな。それにしてもオーウェン、租界地での暮らしにもそろそろ慣れたみたいだね。君が生活しているのは、機構クリムト、南軍、友邦都市連合の勢力が拮抗している場所だから、僕には窺い知ることのできない不便さがあるのかもしれないけれど。ね、正直なところ、どうなんだい？

蟹座学園にいます、そういうことも気になるのさ。

今日は何かとても取り留めのないことばかり書いたと思う。まるで世間話だね、これじゃあ。しかし、たまにはこういう内容でも良いじゃないか。蟹座学園に雪が降って、卒業式の準備で忙しくなり、レイヴアンはいつものように湾のテトラポットで「すつとするやつ」を味わって、僕は食料雑貨店で百合印ソーダを買った。

そんな一日だったのさ。

そんな一日の方が、君も、蟹座学園や僕を容易に思い浮かべることができると考えて。

小細工かな？

そうかもしれない。

こう見えて、僕も君に色々と気を遣っているんだ。

今日は、

□

□

という言葉で締めくりたい。本当は君のすぐ側で告げたいのだが、それが不可能な境遇だから、お互いに。そうそう」

□

の中には君が思う言葉を入れてほしい。

それが僕の言葉だよ。

どうだい、しゃれてない、かな？

（追記）

今日、僕が百合印ソーダを買った頃、機構クリムトから監察官が蟹座学園にやってきた。監察官がどういった目的で訪れたのか、良く分からないけれど、午後はその話題で持ちきりだったよ。不穏な気配がするとレイヴァンは言っていたが、とりあえず様子を見てみよう、と思う。

3月15日

今日は本当に、驚かせて、ごめん。

この書簡は射手座航空社の快速通信船で送るから。君の元に届くのは三日後、つまり前回の手紙が到着した次の日になるだろう。こんなに早く手紙を書くことになるなんて僕も思っていなかったのだが、もしかすると、これが最後になるかもしれない。状況はそれほど差し迫っているし、レイヴアンは、君ほどではないにしても僕の大切な友人だから。

昨日、アルフォンス・レイヴアンがいなくなった。

「月読文具店に行く」と教室の僕の机に書き置きを残して。レイヴアンの目的は、文具店の地下に住む三人目の異邦人にあつたようだ。あいつは、灰色の布で全身を覆ったあの異邦人が、彼らの正体を暴く鍵と睨んでいた。僕はもっと慎重に事を運ぶべきだと主張したのに、あいつは耳を貸さなかった。月読文具店にはなぜか百合印の高級文具が大量に入荷していて、潜入するのなら新商品目当ての生徒が詰めかける今しかないと考えていたから。

レイヴアンは月読文具店に行つて、帰らなかった。

僕はレイヴアンを探したよ。

あいつが行方不明になるなんて、何かの間違いだと思って。それに僕にはイエンやトーラが悪を成すような人間だとは考えられなかった。でも、レイヴアンは教室にも、図書館の書庫にも、湾のテトラポットにもいなかった。

どこにもね。

それでも歩き続けて、どれくらいの時間が経つたのだろう。途方に暮れた僕は、ライオン広場近くの壁画回廊に足を踏み入れていた。神話や寓話が色々な表現技法で語られている。天使と蠍の物語も、

西日を浴びて輝いている場所に。

丁度、蠍の王が権天使を守って息絶える、その間際のレリーフで、僕はイエンと出会った。

ほら、偶然という概念は、何て都合の良いものなのだろうって以前書いたよね。本当にそうだよ。僕はレイヴァンを探していて異邦人と出会うとは思っていなかったから、彼を前に戸惑ってしまった。でも、イエンの方はというと、僕のことを待っていたかのように振り返ると、帽子を掲げて会釈をしたんだ。

僕は勇気を出して問い掛けたよ。

「あなたがたは、何をしようとしているのですか？」

それなのにイエンは、僕の言葉の意味を承知しているくせに、

「より良いものを、より安く、だよ」

と、はぐらかした。

僕はイエンを強く見詰めた。あの時、僕は異邦人にレイヴァンの所在を問い詰めるべきだったと思う。形振り構わずね。そうすれば、もつと僕にとって有利な形で事を進めることが出来たかもしれない。でも、穏和な表情を浮かべているイエンと向かい合っていると、彼が人攫いのような恐ろしいことに関係しているとは、とても考えられなくなったんだ。状況は、監察官はともかく、レイヴァンの失踪について、何か知っているのは確実だと警告していたのに。

「レイヴァンは……」

と口にしただけで、その後を続けることができなかった。

でも、イエンは僕の感情を推測したのだろう。

「君の友達のことは、悲しむことじゃない」

と言った。オーウェン、信じられるかい？ レイヴァンが行方不明になったことにかかわっていると、彼は自ら認めたんだ。

イエンは蠍の王と権天使を背に、僕と目線を合わせた。

「アルフォンス・レイヴァンは今、幸せの最中にいるのだから」

彼は僕を諭すように囁いた。レイヴァンは、数え切れないほどの痛みや苦しみ、悲しみ、そして死といった円の過程から解放される

のだから、むしろ喜ばなければならぬ。円の過程、イエンは何
度もその言葉を口にしたよ。この世界は嘘と欺瞞に満ちていて、体
面だけは華やかな卒業式のような茶番が罷り通っていて、僕らに無
用の責め苦を負わせているのだ、とも。

オーウェンには、イエンの話が理解できるのだろうか。

僕には分からなかった。

彼が途方もなく邪悪な観念に支配されているということ以外は。
だって、イエンは僕らが「神聖な」と教えられてきたことを、こ
とごとく否定してみせたのだからね。優しげに振る舞う異邦人の、
闇の部分、僕は垣間見たのかもしれない。僕は嫌悪感で一杯になっ
た顔で、レイヴアンを返せと呟いた。

でも、イエンはとても穏和で、それでいて少し残念そうに俯いた
だけだった。きっと彼は、僕だったら理解できると考えていたのだ
ろう。でも僕は違った。僕が何よりも友情を優先させる人間だと、
異邦人も思い知ったに違いない。彼は、

「君は本当に清らかな魂を持っているなあ」

と賞賛すると、少し残念そうな表情は大半が色眼鏡で隠れてしま
って、僕に「ずっとするやつ」と一つの鍵を手渡した。

「ずっとするやつ」は、レイヴアンが湾のテトラポットで吸ってい
たものと同じだった。

鍵には、何の装飾もなかった。

「私たちは高貴な魂を好む。そういうものを探し続けて旅をしてい
るんだ」

その鍵は月読文具店の地下へと繋がる、とイエンは教えてくれた。
もし僕に勇気があつて、本当にレイヴアンを助けたいのなら、と前
置きしてね。そして彼は帰っていったよ。まさか蠍の王が自分の誇
りを捨てるようなことはしないだろうから、自分の言葉は失言だつ
たと謝りながら。

ああ、もう時間がないや。

聡明なオーウェンなら気が付いているだろう。僕はこれからレイヴァンを助けに行く。

月読文具店の異邦人たちは恐ろしいほど計算高い。助けを求めたけれど、誰も僕の話を用意してくれなかった。クリスやマーチンたちは月読文具店の商品に魂を奪われているから、僕の言葉なんて話半分にも聞いてくれなかったし、教師たちはそもそも月読文具店の存在を知らないから、誰も僕の話なんて立ち止まって聞こうとしなかった。機構クリムトに訴えるのが一番だと思うけれど、一介の生徒の身ではクリムトに接触する手段はないんだ。それこそ監察官なりが蟹座学園を訪れない限りね。

僕はレイヴァンの気持ちを今更ながら痛感したよ。

でも、レイヴァンに僕がいたように、僕にはオーウェンがいる。

僕にできるのはこのことくらいだ。今、この手紙を書いている机の脇には、常夜路地の鍵屋で作ってもらった合鍵がある。この手紙と共に同封しておくよ。もし僕が行方不明になったら、一週間以内に手紙を出さなかったら、君が異邦人の悪行を暴いて欲しい。

彼らが月読文具店へと僕を誘い出しているというのは承知している。

でも、彼らの正体を知るのは僕が望んでいたことでもあるんだ。

僕は月読文具店の異邦人からレイヴァンを救い出し、自分の疑問に決着をつける。

僕はオーウェンに誓うよ。

絶対に君を悲しませないってね。

3月20日

蠍の王から権天使へ

もう暦の上では春だというのに肌寒い毎日が続いているのは、たぶん僕の心が影響を及ぼしているからなのだろう。咲き綻ぶ白い花は雪に変生して僕らの足下を埋め尽くす、なんてね、ちょっとした詩人のつもりで書き出しを始めたかったんだ。オーウェン、僕の大切な権天使、この手紙はたぶん君のすぐ側で読むことになるだろう。目を閉じた君の髪を掬いながら、いや、横たわる君に覆い被さりながらかもしれない。もちろん冗談だから、心配しなくてもいいよ。君の身体はちゃんと棺に納めて、僕は湾の脇にある水瓶岩礁でこの手紙を朗読すると、心に決めているのだから。

僕は静かに眠る君の横で、自らの罪を告白するんだ。

オーウェン、僕は君を騙したことを謝らなければならない。

月読文具店の異邦人と、クリムトの監察官と、僕と君の共通の友であるレイヴァン。

ああいう風に書けば、君が僕を助けるために帰ってくるのは分かっていたよ。だって僕は誰よりも君の心を理解しているもの。前回の手紙に鍵を同封しておいたから、君は、蟹座学園に到着するとすぐに月読文具店に向かったよね。僕は嬉しかった、本当に。本当に、オーウェンが、僕が君のことを想っているのと同じくらい、僕のことを想ってくれていたと分かったから。

オーウェン、この蠍の王と権天使の友情は、誰であっても壊せやしないんだ。

たとえ機構クリムトであってもね。

君は月読文具店の地下で三人の異邦人と会い、今、こうして僕の

側にいる。あの間際、君の見開いた両目は僕を見据えて「なぜ」と叫んだけれど、いつかきつと、君も分かってくれと信じている。

さて、何から話そうか？

異邦人たちの正体が知りたいかい？

僕らの知らないどこかから佃奉を経由してやってきた彼ら、レイヴァンは最初「ロマ」と考え、次に「人攫い」と決めつけた異邦人たちは、実は錬金術師だった。君も御伽噺の絵本の中で知っているとつよ。魂が十の階段を降りて肉体を得る過程を、人為的に成し遂げる人たち。

ああ、でも彼らのことを語る前に、この世界のことを説明しなければならぬね。

全ては卒業式の時、あの禁域で僕は観てしまったんだ。

僕は観た。水銀ロケットが禁域の上空三千マイルのところで爆発して、その「燃烧効果」で空が鴉色に染まったということを。僕が観たのは墓標の大地に散らばる残骸だった。トーラは僕に囁いた。空から舞い降りる蛍の一つを捕まえてね。蛍は、蛍のようなものという意味で、実際は蛍ではなかったけれど、それは墓標に着床すると瞬く間に消えてしまうんだ。

あの仄かに光るものが何だったのか、もう気付いているよね。

「これは、出席番号6、卒業生ユーグリット君の魂」と、トーラは呟いた。「彼は私が捕獲しなければ、熱帯の密林に住む甲虫になつて、生きながらにして蜂に卵を産み付けられるところだった。ある種の蜂の幼虫は、甲虫の体内で孵化して、成虫になるまで生かさず殺さず肉を食べ続けるの。ほら、あそこに着床したのは出席番号15、卒業生トルア君の魂。彼は私の手が短かったから、これから千年生きた後、産業廃棄物によって五百年苦しみながら死んでいく檜の木になるわ。かわいそう」

彼女は予言者みたいに運命を言い当てていった。

「そうした命、蜂に卵を産み付けられる生でも、クリムトは意味があると考えている。確かに意味はあるわ。天秤宮院によって選別さ

れた卒業生は、まさか自分たちが空高く爆発して、そういう命を与えられるとは露程も思っていなかったでしょうけれど」

蟹座学園は、一つの魂が死んだ肉体から新たな肉体へと移る、そのモラトリウムのために存在すると彼女は言った。円の過程というのは、そういうことなんだよ。僕らは生まれ、死に、生まれ変わり、また死ぬ。その狭間で次の命を決定するための期間が蟹座学園であって、機構クリムトはまさに「三千世界の調和のため」に、僕らの魂を振り分けていく存在なんだ。

でも、特に気高い魂は、円の過程から解放されるようだ。
君のようにね。

まあ、そういう世界の仕組みは租界地に行ったオーウェンにとっては常識だよ。このルカという魂も、あのレイヴアンという魂も、その他大勢の魂も、オーウェンの位置を指して生死を繰り返す。

命から命へ。でも異邦人は、命から物へ、だ。

錬金術師は生命精製の秘法を使い、魂を消しゴムや便箋や、象の置物や、「すつとするやつ」に変えてしまう。君の場合、一瞬の早業で魂を抜き取られた身体は僕の腕の中でみる内に冷たくなって、魂は、イエンとトーラ、そして灰色の導師ユロが唱える韻律によって万年筆へと精製された。

この文章を書いている、この万年筆にね。

僕はレイヴアンが監察官に世話を焼いていたように、異邦人たちに協力していたから、彼らにとって君の魂の万年筆はその謝礼というわけだった。何しろ、監察官を月読文具店に誘い出し、慎重に行動したがっていたレイヴアンの奴を急ぎ立てたのはこの僕なのだから。

今思うと笑ってしまうよ。僕は君への大切な手紙にデタラメを書き連ねてたわけだ。

もし君が僕の手紙をクリムトに届けていたとしても、蟹座学園の生徒はみんな月読文具店の味方だから監察官やレイヴアンのことは完全に隠蔽されるだろう。もちろんオーウェンのこともね。僕は月

読文具店を悪だとは思わないし、機構クリムトが間違っていると言
うつもりもない。だけど、僕を騙し、オーウェンとの友情を消滅さ
せようとしたことだけは我慢がならないんだ。

オーウェン、君をクリムトの汚い手から取り戻すためなら何でも
するつもりだったさ。

オーウェン、やっと僕の元に帰ってきたね。

この枯れた心は君がいなくなって虚無しか感じられなくなったけ
れど、僕のささやかな死は、君の帰還によって今、新たな命を得た。
こういう結末になって、オーウェンの透明な声や、屈託のない笑顔
が見られないのは残念でならない。でも、瞼を閉じれば、ほら、君
の魂の歌を聴くことができるよ。

オーウェン、君を騙し、君の身体を死に至らしめたのは本当にす
まないと思う。他に方法がなかったなんて言い訳にはしたくない。
僕はこの罪によって未来永劫、救われることはないだろう。でも、
それで良いじゃないか。僕は救いが欲しいわけではなく、オーウェ
ンとの永遠に続く友情が欲しいのだから。

それに、肉体を失ったオーウェンの姿は、翼を失い蠍の王の庇護
を受ける権天使にぴったりだよ。

オーウェン、どうか僕を許してほしい。

オーウェン、僕らは最後の瞬間までずっと一緒だ。

だからオーウェン、僕は君の魂で精製された万年筆を抱きしめて、
何度もこう呟くことにするよ。

「おかえり」

そして、水瓶岩礁から冷たい海水へと沈んでいく棺の君を見送っ
て、最後に一言だけ言っただ。僕の大嫌いな言葉、でも、吹き荒ぶ
風に声帯が麻痺しても、この手紙と共に安らかな君の姿に手向ける。

ただそれだけに、

『さよなら』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6729y/>

蠍の王から権天使へ

2011年11月20日03時13分発行